

Title	吐魯番出土文物研究会会報 第105号
Author(s)	
Citation	吐魯番出土文物研究会会報. 105 p.1-p.8
Issue Date	1995-07-01
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/78916
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吐魯番出土文物研究会会報

第105号

1995年7月1日
吐魯番出土文物研究会

目次

- 〈史料紹介〉敦煌出土四～五世紀陶罐・陶鉢銘集成（Ⅲ）－附、敦煌、嘉峪関・酒泉陶罐・陶鉢出土古墓群一覽……………關尾史郎編 1

敦煌出土四～五世紀陶罐・陶鉢銘集成（Ⅲ）

— 附、敦煌、嘉峪関・酒泉陶罐・陶鉢出土古墓群一覽 —

關尾史郎編

【はじめに】

先に私は、会員の町田隆吉氏と共編で「敦煌出土四～五世紀陶罐・陶鉢銘集成－附、書道博物館所蔵三世紀陶罐銘－」を本誌第28、29号に発表した（以下、前稿と略記。なお第34号の補訂も併照されたい）^{（1）}、最近、敦煌市の西北郊外に位置する祁家湾古墓群から出土した陶罐・陶鉢の全貌が明らかになった。またその発掘報告書などから、祁家湾以外でも陶罐・陶鉢が出土していることがわかった。そのなかには敦煌以外の地から出土したもので、前稿作成時に見落としていたものも含まれている。

なお簡報によれば、既に紹介した敦煌の新店（天）台・佛爺廟湾でも、1987年に4度目の発掘調査が行なわれ、116基の墓から22点の陶罐・陶鉢が出土したという^{（2）}。しかし詳細はなお未発表であり、かつ祁家湾からだけでも、前稿で紹介した総数を上回る数の陶罐・陶鉢が出土しているので、ここでは、とりあえず祁家湾出土品を中心として整理しておきたい。このほかにも、なお見落としているものもあるだろうから、いずれ続稿を起こすことになると思う^{（3）}。

- （1）その後公刊された関連論稿として、劉昭瑞「談考古発現的道教解注文」（『敦煌研究』1991年第4期）がある。
- （2）何双全「敦煌新店台、佛爺廟湾晋至唐墓群」（『中国考古学年鑑 1988』北京 文物出版社、1989年10月）。何氏によれば、銘文の紀年は西晋の元康七（二九七）年から、前凉の建興一九（三三一）年に及んでいるという。またこの間、建興紀年のものが複数以上含まれているようである。
- （3）実際には三世紀の陶罐も出土しており、また前述したように敦煌以外の地からの出土品も含まれているので、本稿の表題も修正すべきかもしれないが、混乱を避けるため従来通りとした。また文字資料としての側面を重視するという観点に立てば、陶罐・陶鉢銘よりも、鎮墓文とすべきであろうが（陶罐・陶鉢は書写材料にすぎないのだから）、この点についても、同じ理由で従来通りとした。また前稿のような録文の掲載を省略したのは、ひとえに紙幅の都合による。また番号をローマ数字からアラビア数字に改めたが、これももっぱら技術的な制約によっており、他意はない。

【敦煌出土四～五世紀陶罐・陶鉢銘集成Ⅲ】

E 1985年敦煌祁家湾古墓群出土

敦煌県城西北方の戈壁灘上に位置する祁家湾には、漢代から唐代にかけて築造された万単位 of 古墓が散在しており⁽¹⁾、既に1976年にそのうちの1基だけ発掘が行なわれたが⁽²⁾、1985年の8月から11月にかけて甘肅省文物工作隊により、西晋から五胡十六国時代にかけて築造された117基の発掘が行なわれ、計88点の陶罐（斗瓶 このうち紀年を有するものは約半数の21対42点である）と、墨書銘を有する陶鉢が1点出土した。この出土点数は一地区としては最大である。ここでは掲載順も含めて下記の報告書に依拠しており、模本・録文をはじめ、別表中の断面図・写真の出典も全てこの報告書である。

■甘肅省文物考古研究所編（戴春陽・張 瓏）『敦煌祁家湾—西晋十六国墓葬発掘報告—』北京文物出版社、1994年10月

（1）張 瓏「敦煌祁家湾漢至唐代墓群」（『中国考古学年鑑 1986』北京 文物出版社、1988年3月）

（2）敦煌県博物館考古組・北京大学考古実習隊（張小舟）「記敦煌発現的西晋、十六国墓葬」（北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』第4集 北京 北京大学出版社、1987年6月）

1. 西晋咸寧二（二七六）年八月呂阿徵陶罐銘（M320:18 朱書・22行と朱点=A型Ⅰ式 〈模〉102頁図71 〈録〉100, 102頁）

2. 西晋泰熙元（二九〇）年四月呂阿豊陶罐銘（一）（M321:24 朱書・15行と朱点=A型Ⅱ式 〈模〉103頁図72-3 〈録〉102頁）

* 泰熙なる元号については、四月朔日の干支=庚寅が一致するので、西晋武帝の「太熙」と考えられる。なお148頁、参照。

3. 西晋泰熙元（二九〇）年四月呂阿豊陶罐銘（二）（M321:23 朱書・15行=A型Ⅱ式）

* 録文は掲載されていないが、103頁の解説によれば、2と同じである。

4. 西晋元康五（二九五）年十月□□仁陶罐銘（M340:20 朱書・13行+ α =A型Ⅴ式 〈模〉103頁図72-2 〈録〉104頁）

5. 西晋建興四（三一六）年十一月徐男□陶罐銘（M364:11 朱書・7行=A型Ⅶ式 〈模〉105頁図73-1 〈録〉104頁）

6. 年次未詳陶罐銘（一）（M208:12 朱書・10行+ α =A型Ⅷ式 〈模〉105頁図73-2 〈録〉104, 106頁）

7. 西晋建興元（三一三）年郭□□陶罐銘（M320:22 朱書・9行+ α =A型Ⅷ式 〈録〉106頁）

8. 前凉建興九（三二一）年十月頡孟姜陶罐銘（M208:29 朱書・10行=A型Ⅸ式 〈模〉105頁図73-3 〈録〉106頁）

9. 西晋建興二（三一四）年閏（十）月呂軒女陶罐銘（一）（M319:12 朱書・11行=A型Ⅸ式

〈模〉 107頁図74-2 〈録〉 107頁)

10. 西晉建興二(三一四)年閏(十)月呂軒女陶罐銘(二) (M319:13 朱書・11行=A型Ⅸ式)

* 録文は掲載されていないが、107頁の解説によれば、9と同じである。

11. 前涼建興十八(三三〇)年六月郭祁子陶罐銘 (M328:2 朱書・14行=A型Ⅹ式 〈模〉 103頁図72-1 〈録〉 108頁)

12. 年次未詳蓋顔仲陶罐銘 (M302:7 墨書・11行=A型Ⅹ式 〈模〉 107頁図74-1 〈録〉 108頁)

13. 年次未詳□宮華陶罐銘 (M206:3 朱書・14行と瓶底墨書「前」字=A型Ⅹ式 〈模〉 109頁図75-1 〈録〉 108～109頁)

14. 前涼建興廿九(三四一)年八月万安陶罐銘 (M218:4 墨書・10行=A型Ⅺ式 〈模〉 109頁図75-2 〈録〉 109～110頁)

15. 年次未詳陶罐銘(二) (M218:19 墨書・6行=A型Ⅺ式 〈模〉 111頁図76-1 〈録〉 110頁)

16. 前涼建興卅一(三四三)年三月吳仁姜陶罐銘(一) (M356:12 朱書・9行=A型Ⅺ式 〈模〉 111頁図76-3 〈録〉 110頁)

17. 前涼建興卅一(三四三)年三月吳仁姜陶罐銘(二) (M356:13 朱書・9行=A型Ⅺ式 〈模〉 111頁図76-2 〈録〉 110, 112頁)

* 16とともに元号を欠いているが、建興紀年であることは疑いない。なお 147頁、参照。

18. 年次未詳陶罐銘(三) (M351:24 墨書・9行=A型Ⅺ式 〈模〉 113頁図77-1 〈録〉 112頁)

19. 前涼升平十二(三六八)年二月郭遙黄陶罐銘 (M349:3 墨書・12行=A型Ⅻ式 〈模〉 113頁図77-2 〈録〉 112頁)

20. 前涼建興卅七(三四九)年正月陶罐銘 (M351:10 朱書・5行+α=A型Ⅻ式 〈模〉 113頁図77-4 〈録〉 112, 114頁)

* 元号を欠いているが、16, 17と同じように建興紀年であろう。147頁、参照。

21. 前涼建元六(三七〇)年九月魏得昌陶罐銘 (M371:5 朱書・12行=A型Ⅻ式 〈模〉 113頁図77-3 〈録〉 114頁)

* 「建元」は前秦の元号であるが、当時敦煌は前涼の勢力下にあったことは疑いないので、前涼が前秦の元号を奉用していたと考えざるをえない(關尾「吐魯番文書にみえる四・五世紀の元号再論 - 侯燦「晉至北朝前期高昌奉行年号証補」を読む -」〈下〉〈本誌第43号、1990年〉、参照)。

22. 前秦建元十三（三七七）年十二月工口子陶罐銘（一）（M348:5 墨書・8行+ α =A型Ⅻ式〈模〉115頁図78-1 〈録〉114頁）
23. 前秦建元十三（三七七）年十二月工口子陶罐銘（二）（M348:6 墨書・11行=A型Ⅻ式〈模〉115頁図78-2 〈録〉114, 116頁）
24. 北涼神璽二（三九八）年八月敦煌郡（敦煌縣）西鄉里民口富昌陶罐銘（一）（M310:15 墨書・14行=A型Ⅻ式 〈模〉115頁図78-3 〈録〉116頁）
25. 北涼神璽二（三九八）年八月敦煌郡（敦煌縣）西鄉里民口富昌陶罐銘（二）（M310:22 墨書・14行=A型Ⅻ式）
* 録文は掲載されていないが、116頁の解説によれば、24と同じである。
26. 北涼神璽二（三九八）年十一月敦煌（郡敦煌縣）西鄉里民陶罐銘（M310:16 墨書・7行+ α =A型Ⅻ式 〈模〉115頁図78-4 〈録〉116～117頁）
27. 西涼建初五（四〇九）年閏（十）月敦煌郡敦（煌）縣都鄉里民畫虜奴陶罐銘（一）（M336:4 朱書・9行=A型Ⅻ式 〈模〉118頁図79-1 〈録〉117頁）
28. 西涼建初五（四〇九）年閏（十）月敦煌郡敦煌縣都鄉里民畫虜奴陶罐銘（二）（M336:5 朱書・12行=A型Ⅻ式 〈模〉118頁図79-2 〈録〉117頁）
29. 年次未詳陶罐銘（四）（M301:12 墨書・4行=A型Ⅻ式 〈模〉119頁図80-2 〈録〉119頁）
30. 北涼玄始九（四二〇）年九月敦煌郡敦煌縣都鄉里民口安富陶罐銘（M312:5 墨書・11行=A型Ⅻ式 〈模〉118頁図79-3 〈録〉119頁）
31. 西晉大康六（二八五）年三月頓覓兒陶罐銘（一）（M209:3 朱書・15行=B型Ⅰ式 〈録〉120頁）
* 大康なる元号については、三月朔日の干支=己未が一致するので、西晉武帝の「太康」と考えられる。
32. 西晉大康六（二八五）年三月頓覓兒陶罐銘（二）（M209:1 朱書・14行=B型Ⅰ式 〈模〉121頁図81-2 〈録〉120～121頁）
33. 西晉元康六（二九六）年正月賁口陶罐銘（M210:8 朱書・13行=B型Ⅱ式 〈模〉121頁図81-1 〈録〉121～122頁）
34. 西涼建初十一（四一五）年十二月敦煌郡敦煌縣西鄉里民魏平友陶罐銘（M369:9 朱書・13行=C型 〈模〉119頁図80-1 〈録〉122頁）
35. 年次未詳陶鉢銘（M310:23 墨書・16行+ α 〈模〉87頁図61 〈録〉86～87頁）

F 敦煌三危山下出土

正式な発掘報告はなく、出土年代さえ明らかではないが、Eの『敦煌祁家湾』を通じて、段文傑氏が三危山下出土の陶罐銘の一部を紹介していることを知った。出典は段氏の下記の論稿である。

■段文傑「道教題材是如何進入仏教石窟的－莫高窟二四九窟窟頂壁画内容探討－」（敦煌文物研究所編『1983年全国敦煌学術討論会文集』石窟・芸術編上 蘭州 甘肅人民出版社、1985年8月）

1. 前涼建興三十（三四三）年陶罐銘（〈録〉13頁〈一部〉）

* 段氏は、出土墓を「前涼建興三十年墓」としているだけなので、厳密に言えば、陶罐銘の紀年は不詳ということになるが、陶罐銘の紀年が墓自体の年代を決定する手がかりになることが多いので、ここでもそのように考えておきたい。

G 1972年嘉峪関新城古墓群出土

有名な壁画墓を含む古墓群だが、そのなかの1基から1点だけだが、銘文を有する陶罐の出土が報告されている。ここでは銘文を有する陶井もあわせて挙げておきたい。依拠した報告書は下記の通りである。

■甘肅省文物隊・甘肅省博物館・嘉峪関市文物管理所編『嘉峪関壁画墓発掘報告』北京 文物出版社、1985年10月

1. 年次未詳陶罐銘（M1:9 朱書・16行 〈図〉26頁図22－3 〈録〉25～26頁）

* 録文の冒頭部分は「甘口ニ口」と釈読されている。これが甘露なる元号だとすると、魏と前秦にある。甘露二年は前者だと二五七年、後者だと三六〇年になる。前者の可能性のほうが高いが、とすると、西北地区における陶罐銘の初出例になろう。

2. 年次未詳陶井銘（M6:7 刻書・1行 〈図〉29頁図26－5 〈録〉28頁）

* 「王阿初」とのみある。あるいは墓主の姓名であろうか。なお嘉峪関市志弁公室編『嘉峪関市文物志』蘭州 甘肅人民出版社、1990年12月、81頁の「嘉峪関市部分出土器物表」は、「灰陶倉」とする。

【表 型式別祁家湾出土陶罐点数一覧】

〔凡 例〕

1. 本表は、Eとした1985年敦煌祁家湾古墓群出土の陶罐88点について、型式によって分類したものである。型式の分類と名称は、前掲の『敦煌祁家湾』に依拠している。
2. 「形態上の特徴」はあえて翻訳せず、原文のままとした。
3. 「断面図」と「写真」は、ともに『敦煌祁家湾』所載のものの番号である。なお「断面図」である図70は、全て同書の101頁に掲載されているものであり、「写真」の図版は、同書の巻末のものである。なお「断面図」も「写真」も、同書には複数以上出土したその型式のなかから一点だけが掲載されているが、ここではそれを特定しなかった。
4. 整理番号は『敦煌祁家湾』に従ったが、同書の掲載順に列挙したが、このうち下線を引いたものは、模本や録文が公表されていることを示している（模本も録文も掲載されていないものは、解説から内容が判明するものであっても、下線の対象外とした）。

表 型式別祁家灣出土陶罐点数一覧

型 式	形 態 上 の 特 徴	断面図	写真 (図版)	点数	整 理	番 号
A 型	直 腹			78		
A 型 I 式	斂口三角縁	70-6	36-4	2	<u>M320:18</u>	
A 型 II 式	尖角・口微斂	70-12	39-3	2	<u>M321:24, M321:23</u>	
A 型 III 式	縁成短三角縁	70-7	36-6・5	2	<u>M306:14, M362:15</u>	
A 型 IV 式	侈口尖三角縁	70-10	37-1	3	<u>M330:13</u>	
A 型 V 式	侈口圓三角縁	70-11	37-2	2	<u>M340:19, M340:20</u>	
A 型 VI 式	侈口短三角縁	70-17	37-3	3	<u>M321:9</u>	
A 型 VII 式	侈口較短的圓三角縁	70-8	38-1	4	<u>M364:11, M318:19</u>	
A 型 VIII 式	口微侈・圓縁	70-1	38-3・2	13	<u>M365:1, M208:12, M207:11, M320:22</u>	
A 型 IX 式	圓口微侈	70-2	39-4	7	<u>M208:29, M319:12, M319:13</u>	
A 型 X 式	侈口小平沿	70-3	37-5	10	<u>M328:1, M328:2, M302:7, M206:3</u>	
A 型 XI 式	侈口小平沿尖圓唇	70-14	40-4	7	<u>M218:4, M218:19, M356:12, M356:13, M351:24</u>	
A 型 XII 式	侈口長領折領	70-15	38-6・4	8	<u>M349:3, M351:10, M371:5, M348:5, M348:6, M302:4</u>	
A 型 XIII 式	侈口長領束頸	70-16	37-4・	7	<u>M313:1, M313:7, M310:15, M310:22, M310:16, M336:4, M336:5</u>	
A 型 XIV 式	侈口・尖唇・平沿	70-4	38-5 40-2・1 ・37-6	8	<u>M301:12, M312:5, M313:13</u>	
B 型	大口小底曲腹			8		
B 型 I 式	侈口尖圓唇・上腹部尖凸	70-5	39-5	2	<u>M209:3, M209:1</u>	
B 型 II 式	圓曲腹	70-18	40-3	2	<u>M210:8</u>	
B 型 III 式	侈口凸肩	70-9	39-2	4	<u>M369:6</u>	
C 型	微卷沿圓鼓腹大平底	70-13	39-1	2	<u>M369:9</u>	

【敦煌、嘉峪関・酒泉陶罐・陶鉢出土古墓群一覧】

〔凡 例〕

1. 本一覧は、前稿と本稿で紹介した陶罐・陶鉢が出土した敦煌、嘉峪関両地区の古墓群について、各古墓群ごとに簡単な紹介とともに、参照すべき簡報と正式な発掘報告を列挙したものである。ただし嘉峪関新城古墓群は、酒泉丁家間古墓群とともに構成される一大古墓群なので、後者についてもあわせて紹介した。
2. 正式な発掘報告を◎で、主として雑誌に掲載された簡報を○で表わした。掲載順序は、各古墓群ごとに前者を冒頭に、後者をその後列挙した。複数以上の簡報が出ている場合は、公表された年次順とした。
3. 発掘年次は、正式な発掘報告と簡報によって異同が認められる場合があるが、ここではそのままとした。
4. 古墓群とその発掘調査の概況については、中国社会科学院考古研究所編『考古学専刊甲種第17号 新中国的考古発現和研究』北京 文物出版社 1984年5月、第5章第2節(2)の「酒泉、敦煌的魏晉墓葬」(楊泓執筆)や、文物編輯委員会編『文物考古工作 1979~1989』北京 文物出版社 1991年1月、「甘肅省文物考古工作十年」(甘肅省文物考古研究所)などを参照されたい。

■ 敦煌祁家湾古墓群(DQM)

- * 祁家湾は敦煌県城西北方の戈壁灘上に位置する古墓群であり、既発掘地域はその東南端のごく一部である。
- ◎ 甘肅省文物考古研究所編(戴春陽・張 瓏)『敦煌祁家湾—西晋十六国墓葬発掘報告—』北京 文物出版社 1994年10月
1985年8月~11月発掘の第201~236号墓と、第301~381号墓の発掘報告。
- 敦煌県博物館考古組・北京大学考古実習隊(張小舟)「記敦煌発現的西晋、十六国墓葬」(北京大学中国中古史研究中心編『敦煌吐魯番文献研究論集』第4輯 北京 北京大学出版社 1987年6月)
1976年発掘、1983年整理の第3号墓(76DQM3)の簡報を含む。

■ 敦煌新店台古墓群(DXM)

- * 新店台・仏爺廟湾・義園湾の三つの古墓群は、敦煌県城の東方から東南方、三危山・鳴砂山の北麓の戈壁灘上に位置する一つの古墓群であり、大まかにいって新店台はその東部地区、仏爺廟湾は西部地区、義園湾は中央地区に相当する。新店台がDXM、仏爺廟湾がDFMというように、それぞれ固有の記号で表記されるが、義園湾の記号は不明である。Fの三危山下というのも、この三つの古墓群のいずれかから採取された可能性が高いが、確証はない。
- なお仏爺廟湾の西方、敦煌県城からは南方に相当する地域にも、小規模な墓葬があるようだが(『文物』1983年第10期、51頁図1、参照)、詳細は不明である。
- 敦煌文物研究所考古組(馬世長・孫国璋)「敦煌晋墓」(『考古』1974年第3期)
1960年10月発掘の第1・2号墓(60M1,2)の簡報を含む。
- 敦煌県博物館考古組・北京大学考古実習隊(張小舟)「記敦煌発現的西晋、十六国墓葬」(前出)
1982年発掘、1983年整理の46基(82DXM2-4,6-12,14-21,23-25,28,29,31-33,35,37,39-41,43-50,52,54,58,64-67)の簡報を含む。

■ 敦煌仏爺廟湾古墓群（DFM）

- 夏 鼎「敦煌考古漫記」（一）（『考古通訊』1955年創刊号）
1944年5～6月発掘の第1001～1010号墓の簡報。第1010号墓からは画像磚が出土。
- 夏 鼎「敦煌考古漫記」（二）（『考古通訊』1955年第2期）
1944年7月発掘の第501～508号墓の簡報。
- 夏 鼎「敦煌考古漫記」（三）（『考古通訊』1955年第3期）
1944年9～10月発掘の第108～110号墓の簡報。
- 甘肅省敦煌県博物館（韓躍成・張 仲）「敦煌仏爺廟湾五涼時期墓葬発掘簡報」（『文物』1983年第10期）
1980年5月発掘の第1～3号墓（80DFM1-3）の簡報。

■ 敦煌義園湾古墓群

- 敦煌文物研究所考古組（馬世長・孫国璋）「敦煌晋墓」（前出）
1970年9月発掘の第1、3～6号墓（70M1,3-6）の簡報を含む。

■ 嘉峪関新城古墓群

- * この新城古墓群と次の丁家閘古墓群も、嘉峪関県城の東方、酒泉県城の西北方に広がる一つの古墓群であり、二つの行政区画にまたがっているためもあってか、新城と丁家閘に区分されている。双方に画像磚墓が含まれる。
- 甘肅省文物隊・甘肅省博物館・嘉峪関市文物管理所編『嘉峪関壁画発掘報告』北京 文物出版社 1985年10月
1972年4～6月発掘の第1～4号墓と、1972年10月～1973年9月発掘の第5～8号墓の報告。
- 嘉峪関市文物清理小組「嘉峪関漢画像磚墓」（『文物』1972年第12期）
1972年4月発掘の第1～4号墓の簡報。
- 甘肅省博物館・嘉峪関市文物保管所（張朋川）「嘉峪関魏晋墓室壁画の題材和艺术価値」（『文物』1974年第9期）
1972年10月～1973年1月発掘の第5～7号墓と、1973年9月発掘の第8号墓の壁画紹介を含む。
- 甘肅省博物館（呉昶驥）「酒泉、嘉峪関晋墓的発掘」（『文物』1979年第6期）
1977年5～6月発掘の第9～11号墓（観M9-11）の簡報を含む。
- 嘉峪関市文物管理所（宋子華・楊会福）「嘉峪関新城十二、十三号画像磚墓発掘簡報」（『文物』1982年第8期）
1979年11月発掘の第12・13号墓（M12,13）の簡報。

■ 酒泉丁家閘古墓群

- 甘肅省文物考古研究所編『酒泉十六国墓壁画』北京 文物出版社 1989年8月
1977年8月発掘の第5号墓の報告・図録。
- 甘肅省博物館（呉昶驥）「酒泉、嘉峪関晋墓的発掘」（前出）
1977年5～6月発掘の第1～5号墓（丁M1-5）の簡報を含む。

（以上）

事務局（連絡先） 〒182 東京都調布市国領町5-19-14

荒 川 正 晴 方

TEL 0424(81)4633

吐魯番出土文物研究会 (The Research Society for Turfan Relics)